

## 【資 料】

# 国際救援・開発協力看護師コースを修了した卒業生の 国際救援ナースを目指すことに対しての思い

～ 質問紙による実態調査から～

藤 井 知 美<sup>\*</sup>, 渡 邊 智 恵<sup>\*</sup>, 村 田 由 香<sup>\*</sup>

## 【要 旨】

目的：A 赤十字看護大学の救援コースを修了した卒業生の、国際救援ナースを目指すことに関する現状を明らかにする。

方法：救援コース修了生 45 名（平成 24 年度卒業生 17 名，平成 25 年度卒業生 28 名）に対し，国際救援ナースを目指す現状を尋ねる項目を独自に作成し，平成 26 年 12 月～平成 27 年 2 月に無記名自記式質問紙調査を実施した。

結果：13 名から回答を得た（有効回答率 30.2%）。7 割が卒業時に国際救援ナースを目指していたが現在は約 2 割へ減少していた。目指していない・どちらでもない理由は，業務や疾患の学習が忙しかったため，修了生は臨床現場で求められる看護レベルに到達していると考えておらず，まず自立した看護職になることを目指していた。また，英語学習と国際救援活動を目指す者の集まりをつくる支援のニーズが明らかになった。

考察：1）国際救援ナースには高い能力が求められるという厳しさを覚悟する必要性を看護基礎教育で教授すること，2）英語学習を継続できる様自主的に学習に取り組む自己学習能力の重要性，3）キャリア発達や獲得能力を認識する機会提供等モチベーション維持の支援と，修了生自身によるモチベーション維持の努力が必要であると考えられた。

【キーワード】 国際救援・開発協力看護師コース，国際救援ナース

## I. 研究の背景と動機

A 赤十字看護大学は，国際的に活躍できる資質を備えた看護師育成を目的に，国際救援・開発協力看護師コース（以下，救援コースとする）開設のための「もっとクロスする救援ナースの育成」事業（平成21年度から23年度）を実施し，試行期間を経た後，平成24年度に救援コースを開設した。救援コースでは卒業に必要な単位に加え救援コースに特化された科目を履修し，1. 異文化コミュニケーション能力，2. 赤十字の救援看護師の役割能力の充実，3. 災害時における問題解決能力，ヒューマンケアリングを実践する人間性，4. 国際救援時における看護実践力を育み，将来的に国際救援・開発協力看護師として活躍するための基礎能力を身につける，ということが求められる。これまでに救援コースを修了したのは，平成24年度卒業生 17名，平成25年度卒業生 28名の合計45名である。これは国内外の赤十字

ネットワークや人的資源等を活用した，本学の特徴的な教育の取組みである。

日本赤十字社の国際救援活動を行う看護職（以下，国際救援ナースとする）になるためには，看護職の臨床経験3年を必要とされているが，実際には3年で国際救援ナースになることは困難な場合が多かった。国際救援ナースの育成が順調とは言えない状態を検討した日本赤十字社は，国際救援ナースとしての専門能力の獲得に時間がかかることが原因であると分析した。加えて，国際救援ナースを目指すことを断念する者がいるのは，語学のハードルやキャリアパスが不明瞭なことが原因であると分析した。そこで国際活動キャリア開発ラダーを作成し，目標を持ってキャリア形成できるように支援を開始した（日本赤十字社事業局国際部，2010）。また先行研究では，国際救援ナースになることを目指すうえでモチベーションの維持が重要であり，国際救援ナース

\* 日本赤十字広島看護大学

を取り巻く環境がモチベーション維持に関係していること等が報告されている。他には、国際救援活動に必要な知識・能力に関して、既存の看護基礎教育および継続教育で修得困難なものがあることも報告されている（藤井，2014；関，松尾，東，大澤，2010；平野，2006）。

このように、国際救援ナースを目指すことは容易ではなく、救援コースを修了した卒業生が病院勤務をする間に、国際救援ナースになる動機や意欲を失う可能性が考えられた。しかし、救援コースを修了した卒業生が国際救援活動を推進する施設等に就職したのか、国際救援ナースになることの動機や意欲を減少していないか、国際救援ナースを目指すために実際に現在何をしているのかといった現状や、どのような思いを抱いているのかは明らかにされていないため、この研究に取り組んだ。

## Ⅱ. 研究目的と意義

### 1. 研究目的

A 赤十字看護大学の救援コースを修了した卒業生の、国際救援ナースを目指すことに関する現状を明らかにする。

### 2. 意義

救援コースを修了した卒業生が、国際救援ナースになることを目指し続けているかどうか等現状を明らかにすることで、救援コースへのニーズ、卒業後の継続支援のニーズが推察されと考える。また救援コースのカリキュラムの検討、卒業後に国際救援ナースを目指し続けるための看護基礎教育での支援の検討資料となり得るため、意義があると考えられる。

## Ⅲ. 研究方法

本研究は救援コースを修了した卒業生の、国際救援ナースを目指すことに対する思いを明らかにするための研究の一部である。救援コースを修了した卒業生の現状を明らかにするアンケート調査（第1段階）と、更に詳しく国際救援ナースを目指すことに対する思いを明らかにするためのインタビュー調査（第2段階）、の2段階構成とする。今回は第1段階のアンケート調査について報告する。

### 1. 研究対象者，募集方法

救援コースを修了した卒業生45名（平成24年度卒業生 17名，平成25年度卒業生 28名）を対象とし、研究者が知る救援コースを修了した卒業生と面識や繋がりのある人物（以下、知人とする）に、救援コースを修了した卒業生の紹介を依頼した。

## 2. 調査方法

1) 調査期間：平成26年12月～平成27年2月

2) データ収集：調査の主旨を明記した依頼書と無記名自記式調査票を対象者へ送付し，自由意思により郵送返信されたものを分析対象とした。

3) 調査項目：先行研究等を参考に項目を抽出し，独自に作成した調査票を用いた。内容は性別・年齢などの基本的属性と，勤務病棟名，卒業時及び現在国際救援ナースを目指しているか，卒業後の自己研鑽状況，希望する支援などである。

## 3. データ分析方法

現状について得られたデータの単純集計を行い，自由記載部分は内容を検討して分類し，カテゴリ名をつけた。

## Ⅳ. 研究の倫理的配慮

### 1. 救援コースを修了した卒業生の紹介を依頼する知人に対する配慮

救援コースを修了した卒業生の紹介を知人に依頼する際，紹介に関しては知人の自由意思に任せ，知人が依頼を断っても何ら不利益が生じないことを伝えた。

### 2. 研究対象者に対する配慮

救援コースを修了した卒業生へ送付した調査票に添付する依頼文中には，調査の趣旨，目的，意義，無記名調査であり回答者個人が特定されないこと，自由意思での回答であること，得られた情報を外部に漏えいしないこと，得られたデータは研究者のみがアクセスし責任を持って5年間保管すること，研究終了後には速やかに処分すること，データは研究目的以外に使用しないことを明記した。さらに，研究結果は関連する学会等で発表することを説明し，調査票の返信をもって本研究に同意されたものとみなした。なお，本研究は，研究者が所属する施設の研究倫理委員会の承認を受けたうえで実施した（審査番号1408）。

## Ⅴ. 結 果

知人からの紹介を受けて実際に調査票を配布する対象となった救援コースを修了した卒業生は43名であり，24施設に就職していた。調査表の回収数は13であり，回収率30.2%であった。全ての回答を分析対象とした。

### 1. 対象者の概要

対象者13名の年齢は25歳までが11名（84%），26歳以上が2名（16%）であった。卒業年度は平成24年度卒業5名（38%），平成25年度卒業7名（54%），

無回答1名であった。卒業後、就職した施設は国際医療救援拠点病院（国際救援活動に迅速に対応するための体制整備や国際救援ナース等の育成を行う、全国5ヶ所の指定された赤十字病院）が6名（46%）、国際医療救援拠点病院以外が7名（54%）であり、回答者全員が日本赤十字社の医療施設へ就職していた。また、配属部署の診療科名は、内科系病棟1名（8%）、外科系病棟3名（23%）、小児病棟2名（15%）、手術室1名（8%）、集中治療室関連2名（15%）、混合病棟3名（23%）、救急病棟1名（8%）であった（表1）。

## 2. 卒業後就職した施設、または現在就職している施設を選んだ理由

就職した施設、または現在就職している施設を選んだ理由を尋ねたところ、「国際医療救援拠点病院

だから」または「国際救援ナースになるための教育がしっかり出来るようなシステムが確立していると考えたため」が5名（32%）、「地元であった」が4名（25%）であった（表2）。（自由記載）

## 3. 国際救援ナースを目指す状況

卒業時に国際救援ナースを目指していたか、現在目指しているかどうかを尋ねたところ、卒業時に目指していたのは9名（69%）だったが、現在目指しているのは3名（24%）に減少していた（表3）。

## 4. 施設の国際救援活動に関する状況

現在の就職施設に国際救援に関する活動があるかの問いに対して、「はい」11名（85%）、「いいえ」2名（15%）であった。

具体的活動内容（複数回答）は「災害発生時の現地派遣、ERU（Emergency response Unit：緊急対

表1 対象者の概要

	n = 13	
	回答数	%
年齢		
～25歳	11	84
26歳～	2	16
卒業年度		
平成24年度	5	38
平成25年度	7	54
無回答	1	8
卒業後就職した施設		
国際医療救援拠点病院	6	46
国際医療救援拠点病院以外	7	54
配属先の診療科名		
内科系病棟	1	8
外科系病棟	3	23
小児病棟	2	15
手術室	1	8
集中治療室（ICU・CCU・HCU・SCU・NICUなど）	2	15
混合病棟（循環器内科・心臓血管外科）	3	23
その他（救急病棟）	1	8

表2 卒業後就職した施設、または現在就職している施設を選んだ理由

	n = 13	
	回答数	%
国際医療救援拠点病院だから／国際救援ナースになるための教育がしっかり出来るようなシステムが確立していると考えたため	5	32
地元であった	4	25
就職説明会で好印象であった	2	13
今後国際医療救援に力を入れるときいたので	1	6
A地域で就職したほうが国際救援活動に携われる機会が多いと思った	1	6
救急部門に力を入れているため	1	6
実家から近いため	1	6
以前から就職しようと思っていた	1	6

表3 国際救援ナースを目指す状況（卒業時・現在）

	n = 13	
	回答数	%
卒業時、国際救援ナースを目指していたか		
はい	9	69
いいえ	1	8
どちらでもない	3	23
現在、国際救援ナースを目指しているか		
はい	3	24
いいえ	5	38
どちらでもない	5	38

応ユニット）の派遣」が6名（43%）であり、「研修会がある」、「国際救援を目指す人の集まりが定期的にある」と続いた。また、「身近に国際救援ナースを目指す人がいる」は7名（54%）、「いない」5名（38%）、無回答1名であった。また、その人との関係（複数回答）は「先輩」が5名（63%）、「友人」が2名（25%）、「同僚」が1名（12%）であった（表4）。

#### 5. 現在国際救援ナースを目指している者の状況

現在国際救援ナースを目指しているかの問いに「はい」と答えたのは3名であった。その3名ともが、国際救援ナースを目指していることを職場の上司や同僚は知っている」と答えた。国際救援ナースを目指して行動を起こしているかについて、「はい」は1名であった。

現在国際救援ナースを目指している1名の、国際

救援ナースを目指しての具体的な行動内容は「英語自己学習」、「赤十字関連のホームページ・フェイスブックなどを見る」、「病院の主催する国際救援に関する研修会・報告会などに参加する」などであった。一方、行動を起こしていない2名の理由は、「業務が忙しくて時間がない」、「何の行動を起こせばよいのか分からない」などが挙げた。そして国際救援ナースを目指すうえで感じる困難（複数回答）は「日々の業務や勉強におわれてモチベーションを維持することに困難を感じる」との回答があった（表5）。

#### 6. 現在国際救援ナースを目指していない・どちらでもない者の状況

現在国際救援ナースを目指していない・どちらでもない者のうち、救援コースの卒業生であることを、職場の上司や同僚は知っているかの問いに対して、「はい」が6名（60%）、「いいえ」が4名（40%）であった（表6）。

国際救援ナースを目指していない理由（自由記載）として「日常の業務におわれて国際救援活動に必要な英語などの勉強が出来ていない為モチベーションが下がっている」など国際救援に対する意欲の低下や、まずは看護職として自立したいというカテゴリーが導き出された（表7）。

将来、国際救援ナースを目指したいかは、「はい」が4名（40%）、「いいえ」が5名（50%）、無回答1名であった（表6）。どのような状況になったら、

表4 施設の国際救援活動に関する状況

	n = 13	
	回答数	%
施設に国際救援に関する活動はあるか		
はい	11	85
いいえ	2	15
具体的活動内容（複数回答）		
災害発生時の現地派遣、ERUの派遣	6	43
研修会がある	3	22
国際救援を目指す人の集まりが定期的にある	2	14
情報共有の場がある	1	7
英語学習	1	7
各活動の報告会	1	7
身近に国際救援ナースを目指す人がいるか		
はい	7	54
いいえ	5	38
無回答	1	8
身近にいる国際救援ナースを目指す人との関係（複数回答）		
同僚	1	12
先輩	5	63
友人	2	25



表5 国際救援ナースを目指している者の状況

国際救援ナースを目指して行動を起こしている具体的内容（複数回答） n = 1
英語自己学習
赤十字関連のホームページ・フェイスブックなどを見る
赤十字関連の情報誌（日赤新聞など）を読む
国際活動をする団体や組織（赤十字以外）のホームページやフェイスブックなどを見る
病院の主催する国際救援に関する研修会・報告会などに参加する
世界のニュースに注目する
国際救援ナースを目指しているが行動を起こしていない理由（複数回答） n = 2
業務が忙しくて時間がない
配属先病棟の疾患・看護の学習に忙しく、時間がない
何の行動を起こせばよいのか分からない
国際救援ナースを目指すうえで感じる困難（自由記載） n = 3
日々の業務や勉強におわれてモチベーションを維持することに困難を感じる
日々の業務や疾患病態の勉強、研修や課題などでいっぱい、意識して英語にふれる、救援活動の情報を自分で検索しないとモチベーション維持できない
無理かと思うことが多くなった

表6 現在国際救援ナースを目指していない・どちらでもない者の状況

	n = 10	
	回答数	%
救援コースの卒業生であることを、職場の上司や同僚は知っているか		
はい	6	60
いいえ	4	40
将来、国際救援ナースを目指したいか		
はい	4	40
いいえ	5	50
無回答	1	10

表7 国際救援ナースを目指していない理由（自由記載）

カテゴリー	データ
業務が忙しく時間や余裕がない	病棟での勤務がいそがしすぎる
	今の業務に精一杯であるため
	病棟の仕事に手一杯になり外に目を向ける余裕がない
	部署の勉強で精一杯で国際救援のことは考える余裕がない
国際救援に対する意欲の低下	日常の業務におわれて国際救援活動に必要な英語などの勉強が出来ていない為モチベーションが下がっている
	意欲の低下
	実際に看護師として働きはじめたらモチベーションの維持ができなくなった
まずは看護職として自立したい	助産師としての技術をまずは確立したいから
	まずは病棟でリーダーナースの助言なく看護ができるような一人前になりたいから
	一年目はそれどころではなく、まずは一人前の看護師になりたい
異文化看護に対する自信がない	日本人相手でも満足のいく看護ができないのに、外国人を対象に看護できる自信がないから
英語学習が面倒	英語学習が面倒
所属組織が国際救援活動を促進していない	現在の病院が国際医療救援拠点病院ではないから

国際救援ナースを目指すと思うかの問いに、「病棟での仕事をできるようにになれば」などの回答があった（表8）。

## 7. 現在の関心事

現在最も興味のあることを問うと、「配属部署で多い疾患について」、「急変時の対応」など病院での仕事に関することが最も多く、趣味のことなども挙げられた（表9）。

## 8. 現在の自分に役立っている救援コースでの学び

現在の自分に役立っていると思う救援コースでの学びは何かの問いに対して、視野のひろがりや赤十

字の理解、語学力などが回答された（表10-1）。

また学びとは別に、「国際演習」や「仲間を得た」などの回答がされた（表10-2）。

## 9. 国際救援ナースを目指すうえで、所属組織に支援してほしいこと

国際救援ナースを目指すうえで、所属組織に支援してほしいことの問いには、「英語学習」という回答が7名と最も多く、次いで「国際救援を目指す者の集まりをつくること」が4名であった（表11）。

## 10. 看護職として期待されるレベルへの到達の認識

現在の職場で看護職として期待されているレベル

表8 国際救援ナースを目指すために必要な状況（自由記載）

カテゴリー	データ
看護師として独り立ちできる	仕事ができるようになったら
	一人前の看護師になったら
	技術を得られた時
	技量がともなったとき
時間の有効利用、余裕がある	時間を有効に使えるようになったら
	英語ができる余裕ができたなら
英語力が身につく	英語力を得た時
	語学力を持った時
国内救護活動をする	国内（救護）活動ができるようになったとき
改めて国際救援ナースになる目標を持つ	身近な救援ナースの影響を受けたとき
	きっかけを持った時
	強い意志を持った時
	具体的目標があるとき
家族の理解を得る	家族の理解を得られた時
ステップアップする	現在の自分に満足できなくなったら

表9 現在の関心事（自由記載）

カテゴリー	データ
病院での仕事（疾患、看護など）について	病院での仕事
	部署での疾患についてのこと
	小児科のネフローゼ症候群について
	保健師の仕事
	家族看護
救急・急性期看護について	急変時の対応
	急性期の患者への看護、疾患の理解
	集中治療室、救急外来でのナースに求められる知識と技術
自己コントロール	夜勤をのりきる気分転換方法を知りたい
国際救援	国際救援
英語	2年目3年目で少しだけ時間の余裕ができたので英語を使う環境を探している
趣味など	映画をたくさん見たい
	海外旅行の計画、旅行などの趣味
	ダイビング、山登り

表10-1 今の自分に役立っている救援コースでの学び（自由記載）

カテゴリー	データ
視野のひろがり	発展途上にある国の医療現状を知ることによって視野を拡げることができた 日常生活の中で国際的な救援活動について自分から目を向けられるようになった
赤十字の理解	赤十字という組織についてよく知ることができた
語学力、コミュニケーション力	他国の人とのコミュニケーションのとり方、プレゼンの仕方、英語力がついた 医師のカルテは英語記載が多いので英語を学べたこと
モチベーション維持の方法	いろんな方の話を聞く機会を得たので派遣されるまでが大変であること、モチベーションを維持するためにどうするかが分かった

表10-2 救援コースでの印象に残る事柄

カテゴリー	データ
国際演習	熊本研修やフィリピン研修で普通の大学生では経験できないことをたくさん経験できた フィリピンでの研修が今でも思い出すとモチベーションがあがる 海外研修での経験
仲間を得た	同じ意思を持ってコースに進んだ友人と出会えたこと
意思が固まった	漠然とした動機だったものが、大学の授業（世界情勢、講演など）を通して本気で目指したいと思ひ就職したこと
その他	人の生き方を学べた（DVD などを通して） モチベーションが下がっても先輩方の話を思い出して目の前のことをまずはやろうと考えている

表11 国際救援ナースを目指すうえで、所属組織に支援してほしいこと（自由記載）

	回答数
英語学習	7
国際救援を目指す者の集まりをつくること	4
国際救援に関する研修会の開催	3
他の病院での国際救援に関する研修会の情報	3

に到達していると思うかという問いに対して、「はい」と答えた者はおらず、「いいえ」が9名（69%）、「どちらでもない」が4名（31%）であった。

#### 11. 国際救援ナースになれる年数（n = 13）

何年ほど経過したら、国際救援ナースになれると思うかの問いには、「10年」の回答が多く5名（38%）、「5年」が3名（23%）、その他に「6年」、「8年」、「20年」、「年数ではない」と無記入が各1名（8%）であった（表12）。

#### 12. 救援コースや国際救援ナースについての自由記載

救援コースや国際救援ナースについての自由記載を求めたところ、日々の仕事で精一杯である現状と、救援コースでの主に英語学習に関する記述があった（表13）。

表12 国際救援ナースになれると思う年数

n = 13		
	回答数	%
5年	3	23
6年	1	8
8年	1	8
10年	5	38
20年	1	8
年数ではない	1	8
無回答	1	8

表13 救援コースや国際救援ナースについての自由記載

就職後の状況	いざ就職すると目の前の患者の看護で頭がいっぱい
	今は救援ナースどころではなく、看護師として働くことに慣れるので精一杯
	日々の仕事が精一杯である
	仕事を始めると英語学習の時間が限られる
	救援ナースのため何かに取組んだりしていない
	モチベーションを保ち努力することは難しい
	英語力や異文化理解について薄れている気がして不安
国際救援ナースについての気持ち	卒業時には国際救援への興味があり、将来の目標であった
	国際救援に対して考える余裕をもてない
	その気持ちがほとんどなくなった
	救援ナースにはなりたい
	心のどこかでいつかはなりたいと思う
救援コースを修了して良かったこと	学生時代でも国際救援ナースになりたいと思う気持ちに波があった
	救援コースで大切な仲間にてあえた
	フィリピン研修で皆で協力した達成感をもたらしてくれた
	新たに自分への課題をもたらしてくれた
	海外のことを知ることで国外に目を向けられるようになった
	英語はプレゼンやコミュニケーションをとりながらの方法で会話力がついた
	TOEICは自分で努力しなければ点数は上がらないが会話する時間が多かった2～3年生のときTOEICの点数が上がった
救援コースに期待すること	救援コースに入っていて、看護師としてのモチベーションがあがる
	救援コースに入れて本当によかった
	英語は自己学習ではなく、もっと学校側で支援し、学生の間にある程度TOEICの点を取れるようにしてほしい
	学生のうちに英語を使う機会を増やして欲しい
	学生の時に英語学習のサポートができる限りあると良い
	世界に目を向けられるような内容の授業（DVDや話）がしてほしい

## VI. 考 察

### 1. 自己を認識し自立した看護職を目指すという成長

本調査の結果、救援コースを修了した卒業生（以下、修了生とする）たちは卒業時には約7割が国際救援ナースを目指していたが、現在は国際救援ナースを目指す者は2割まで減少していることが分かった。現在国際救援ナースを目指しているが具体的行動を起こしていない者、国際救援ナースを目指していない・どちらでもない者ともに、業務や疾患の学習が忙しくて時間がなくなることが共通した理由として挙げられた。この理由に関しては、高岸（2008）の国際救援要員志望で職場選択した看護者を対象にしたモチベーションを維持する環境の調査においても、意志が消失した要因が「日常の業務」であり、業務遂行のために覚えることが多すぎて余裕がないことを明らかにしており、今回の調査でも同様の結果となった。また、新卒看護師は、学生とは異なる新たな社会生活に参入し社会化する過程において、現実とのズレから生じる否定的な感情であるリアリ

ティ・ショックに遭遇する（勝原，ウィリアムソン，尾形，2005）と言われている。国際救援ナースを目指していない理由には「業務や部署の勉強で精一杯」、「考える余裕がない」、「日本人相手でも満足のいく看護ができない」といった内容が挙がった。しかしこれらは修了生たちがリアリティ・ショックに遭遇した結果であり、現在の看護技術や専門知識のレベルでは、基本的な看護実践にも困難を感じているものと推測する。

修了生たちの中で、現在職場で求められている看護レベルに達していると考えられる者がいなかったこと、国際救援ナースになるまでには5年または10年が必要であると考えられる者が約6割であること、現在最も興味のあることが疾患や看護など病院での仕事が大きな部分を占めているという結果から、修了生の国際救援ナースを目指すモチベーションは低下し、まずは一人前の「自立した看護職」になることが優先課題であると認識するよう変化したと考える。

本調査では、約5割の修了生が国際救援ナースを



目指して国際医療救援拠点病院を選択したことが明らかになった。また、残りの約5割の修了生は非国際医療救援拠点病院に就職したが、赤十字病院であるため85%の病院で何らかの国際救援活動が行われていることが調査結果から明らかになった。したがって修了生を取り巻く環境は、身近に国際救援ナースを目指す人や実際に国際救援活動に携わる人がいると考えられる。このような環境のなかで、国際救援活動の実際や国際救援ナースの看護職としてのレベル、または国際救援ナースになるまでの道程などを知る機会があったものと推測する。

これらのことから、卒業時に国際救援ナースを目指していた修了生は、現在の自分の状況や実力・能力を適切に認識し、現実の厳しさに向き合い、自立した看護職になることを優先する思いに変化したと考えられる。自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する状況把握力（経済産業省，2006）を身につけ、自分の看護実践力や、英語力など国際救援ナースに求められる能力を認識するに至ったと考える。現在は国際救援ナースを目指していないが将来的には目指したいと考える者がいることから、看護の基礎を確立した上で将来の展望を考える必要性が理解できるようになったのであり、成長の証と捉えることができる。

このような自己の状況や能力を認識することを支援するために、次の点を看護基礎教育の中で教授しておくことが重要であると考え。第一に国際救援ナースになることが容易ではないこと、第二に看護職としてあるいは社会人として自立するためには様々な経験が必要であること等である。言い換えると、国際救援ナースには高い能力が求められるという、現実の厳しさに対する覚悟が不可欠であることを伝える必要がある。

## 2. 英語学習に対する高いニーズ

修了生たちは、国際救援ナースになるためには英語学習が必要であり実施したいと思っていることが分かった。しかし、まずは自立した看護職になるための学習が優先されている状況があり、英語学習と看護職としての学習等との両立が困難であることが考えられる。そこで看護基礎教育では英語力の強化を、そして卒業後は英語学習を継続する自己努力が必要であると考え。

まず看護基礎教育の英語学習について、A赤十字看護大学の卒業要件の必要単位数は126単位であるが、救援コースの学生は、国際救援ナースに必要な基礎的能力を育成するために設定された科目を含めて134単位を取得する。これらの特化した科

目は、救援コース設立にあたり大学卒業時に求められる基礎的能力を明らかにした上で検討された（村田他，2008）ものである。英語に関しては通常6単位のところ、救援コースの学生は10単位以上取得することが課せられている。日本赤十字社ではTOEIC730点の取得で国際救援ナースになるための基礎的な研修にエントリーすることが可能となることも踏まえ、特化した科目には英語、または英語で行われる科目が7単位含まれる。このような環境のもとで卒業時の到達目標をTOEIC550点としているが、救援コース在学中には英語力不足を認識しているという研究結果（渡邊，2014）も示すように、修了生全員が目標到達しているわけではない。現在の、1年次から一貫して工夫された英語科目は、eラーニングシステムによる学習やTOEIC受験サポートも行っている。しかし主体的に英語学習を実施するかどうかは本人次第である。また臨床看護実習が集中して行われる3、4年次に英語学習が途切れる傾向があるため、継続できるような英語学習方法や、世代の特徴を捉えたITやポータブルデバイス等の活用を考慮した英語学習方法を意識して修得させる必要がある。卒業後、英語学習の継続に関して多くの国際救援ナースやそれを目指す看護職が苦慮しているため、可能であれば、看護基礎教育においてTOEIC730点により近い英語能力を獲得しておくことが望ましい。

先の高岸（2008）の調査や、看護職以外の職種も含めた国際救援活動実践者を対象とした調査においても英語学習のニーズは挙げられており、国際救援ナースになってからも英語学習のニーズは高いという現実がある（平野，2006；岡本，東浦，2012）。そして国際救援ナースたちは自己努力により英語学習を継続していることも明らかにされている（藤井，2014）。例えば、国際医療救援拠点病院に限らず、各赤十字病院で開催される語学研修への参加、個人的に英語教室に通うことや英字新聞の購読など様々な工夫や努力がされている。しかしながら、所属組織からの支援を自ら獲得し活用するためには本人の意欲や努力が必要である。よって看護基礎教育においても卒業後においても、自分の不足する能力を見極め、自らの課題を見出し自主的に学習に取り組むことができる自己学習力が重要であると考え。学生の段階で主体的に英語学習に取り組む力を獲得しておけば、就職後の環境の変化に対応して継続的、自律的に学習を継続する助けになると考える。

## 3. モチベーションを維持するための支援の必要性

卒業後、自立した看護職になるための臨床経験

を積む期間には、リアリティ・ショックをはじめ様々な困難にあいモチベーションが低下する傾向にあるため、修了生たちが就職後もモチベーションを保ち続けるための支援を検討する必要がある。

日本赤十字施設の看護職（保健師・助産師・看護師）が、段階的に国際救援活動実践能力を向上させていくための継続教育システムである「国際救援活動における看護職の実践能力向上のためのキャリア開発ラダー（以下、国際ラダーとする）」のレベルⅠ～Ⅲは看護実践者ラダーと連動しており、看護実践者ラダーを取得していることが申請要件になっている。まずは看護実践者ラダーの取得が優先され、修了生が認識したように「自立した看護職」になることが求められている。この事実を救援コースの段階で救援コースの学生に明確に伝え、国際救援活動経験者らのキャリアパスを示すことや、国際救援ナースに求められる人材像を明確に伝えることが必要である。つまり看護基礎教育におけるキャリア発達支援が重要となると考える。看護職は生涯主体的に学習し続けることを期待される専門職であり（平井，2009），一人前の看護職となつてからも継続した学習が常に求められている。救援コースの学生は国際救援ナースを目指すという明確な目標を持っているが、昨今看護職の専門性は高まり、高度な知識や技術・経験を身につけることが求められている。このような環境下で自律してキャリアデザインを描き国際救援ナースを目指すためには、学生時代からキャリア発達を学び考えることは有効であると考えられる。

さらに、救援コースでは国際救援ナースに求められる基礎的能力（1．異文化コミュニケーション力，2．状況判断力・問題解決力，3．課題探求力・創造性，4．国際救援時に必要な看護実践力）の育成を目指して授業科目が構築されている。4年間の救援コースを通して獲得した能力が普段の看護実践の場においても発揮できるものであることを意識づけておく必要があると考える。同時に、能力を獲得したことを学生自身が認識できる機会が必要である。通常の科目評価とは別に目標到達度をはかるシステムを構築し獲得能力を可視化することや、独自の救援コース修了証の発行なども一助になると考える。

また、救援コースで取得した単位、つまり獲得した能力が臨床での国際ラダーと連動する仕組みになれば、修了生たちは救援コースでの学びが活かされることが実感でき、モチベーション維持に繋がるのではないかと考える。例えば、国際ラダーⅠの実践能力指標「赤十字」の『赤十字の基本原則を理解す

る』『ボランティア活動に関心を持ち行動する』（日本赤十字社事業局看護部，2011）等は救援コースで獲得可能な能力であるため、救援コースで獲得したと認定した場合、継続教育へ引き継がれることである。

また、国際救援ナースが国際救援活動を目指すモチベーションの維持に関しては、目指す者の集まりをつくることや研修会の開催等が必要であることが先行研究で示されている（平野，2006；高岸，2008；岡本，東浦，2012，藤井，2014）。本研究でも同様に、修了生たちが所属組織に求めるニーズとして、目指す者の集まりをつくることや研修会の開催が挙げられた。最近では非国際医療救援拠点病院においても、語学研修や「めざす会」の立ち上げなど国際救援活動実践者育成の取り組みが行われ始めたという報告があり（渋谷他，2014；竹原他，2014；鶴田他，2014），組織による国際救援活動に携わる人材育成に向けた動きを窺うことができる部分もある。しかし、これら提供される支援を実際に獲得し活用できるかどうかは本人次第である。修了生たちは、救援コースに在籍した学生時代には、志を同じくする仲間と同じ場所で切磋琢磨できたが、卒業後は同じ目標を持つ仲間が近くにいない状況になる可能性がある。よってこれらの所属組織による支援を活用しながら、あるいは各自が修了生と連絡を取り合うなどの行動を起こしたり、新たに仲間を見つけていく等、モチベーションを維持するための自己努力が求められる。

#### 4. 研究の限界と今後の方向性

今回の調査は対象者数が13名と極めて限られており、修了生すべての状況を反映しているとは言い難い。A 赤十字看護大学救援コースのカリキュラムの検討や、学生の継続教育支援プログラム構築などの資料とするためには、対象となる修了生を増やす必要がある。また、第2段階のインタビュー調査では今回のアンケート調査結果での現状を踏まえ、修了生たちの国際救援ナースを目指すことに対する思いをより詳細に明らかにしていく予定である。

## VII. 結 語

1. 救援コースを修了した卒業生は、国際医療救援拠点病院と非国際医療救援拠点病院へそれぞれ約半数ずつが就職し、卒業時に国際救援ナースを目指していたのは約7割だったが、現在目指すのは約2割に減少しており、国際救援ナースを目指して具体的に行動を起こしているのは1名のみであった。



2. 現在国際救援ナースを目指していない・どちらでもない理由は、業務や疾患の学習が忙しくて時間がないからであり、国際救援ナースを目指すモチベーションは低下し、まずは一人前の‘自立した看護職’になることを目指しており、現在最も興味のあることは病院での仕事に関してであった。一方で、現在国際救援ナースを目指していない・どちらでもない者のうち4割は、将来目指したいと考えていた。
3. 英語学習の支援を救援コースと所属組織に対して、国際救援活動を目指す者の集まりをつくる支援を所属組織に対して望んでいた。
4. 救援コースでの学びは、視野のひろがりや赤十字の理解、語学力等であり、現在の自分に役立っていると考えていた。
5. 看護基礎教育において自己の状況や能力を認識できるために、国際救援ナースには高い能力が求められるという厳しさを覚悟する必要性を看護基礎教育の段階から教授することの重要性、英語学習を継続し英語力を高めるために自主的に学習に取り組む自己学習能力の重要性、キャリア発達・獲得能力を認識する機会の提供などモチベーション維持の支援が必要であると考えられた。また、卒業後は所属施設による国際救援活動を目指す者の集まりをつくる支援等モチベーションを維持するための支援と、修了生自らが所属施設による支援を活用する努力の必要性が示唆された。

## 謝 辞

お忙しい中アンケート調査に協力して下さいました救援コースを修了した卒業生の皆様に深謝いたします。皆さまのこれからのご活躍をお祈りいたします。

なお、本研究は日本赤十字広島看護大学の平成26年度共同・奨励研究助成金を受けて実施した。

## 文 献

- 藤井知美 (2014). 日本赤十字看護職の国際活動の継続に影響する要素—フィリピン保健医療支援事業派遣者へのインタビューを通して—. 日本災害看護学会誌, 16(2), 3-15.
- 平井さよ子 (2009). 改訂版 看護職のキャリア開発 転換期のヒューマンリソースマネジメント. 東京, 日本看護協会出版会.
- 平野美樹子 (2006). 国際医療救援要員の派遣環境に関する研究. 平成17年度財団法人政策医療進行財団研究助成研究事業報告書.

勝原裕美子, ウィリアムソン彰子, 尾形真実哉 (2005). 新人看護師のリアリティ・ショックの実態と類型化の試み—看護学生から看護師への移行プロセスにおける二時点調査から—. 日本看護管理学会誌, 9(1), 30-37.

経済産業省(2006). 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf>

村田由香, 吉野純子, 中信利恵子, 川西美佐, 戸村道子, 女鹿喜治 (2008). 4年制赤十字看護大学における国際救援に貢献できる人材育成—基礎的能力を育む教育プログラムの検討—. 日本赤十字看護学会誌, 8(1), 35-42.

日本赤十字社事業局看護部 (2011). 国際活動における看護職の実践能力向上のためのキャリア開発ラダー (国際ラダー) の手引書. 日本赤十字社事業局看護部.

日本赤十字社事業局国際部 (2010). 国際救援・開発協力事業に関わる人材育成検討委員会による報告書. 日本赤十字社事業局国際部.

岡本業穂子, 東浦洋 (2012). 赤十字国際協力人材育成のあり方—看護職の派遣帰国後の研修ニーズに焦点をあてて—. 日本赤十字看護大学紀要, 26, 30-38.

関育子, 松尾文美, 智子, 大澤絵里 (2010). 国際活動を行う赤十字看護職の育成プログラムの開発. 平成20年度「赤十字と看護・介護に関する研究助成」報告書. 学校法人日本赤十字学園.

渋谷美奈子, 梅野幸恵, 朝倉裕貴, 原田真理, 青木達矢, 竹井多恵, 山崎隆志, 丸山洋 (2014). 非国際医療救援拠点病院における要員育成への取り組み成果. 日赤医学, 66(1), 185.

高岸壽美 (2008). 国際救援要員志願者のモチベーションを維持する環境とは. 日赤医学, 60(2), 472-474.

竹原美恵, 白子順子, 清水保貴, 古田達也, 細江優子, 房原篤志, 小池玲, 沖一匡 (2014). 国際救援活動をめざす会を立ち上げて. 日赤医学, 66(1), 186.

鶴田茉林, 新井彩, 齊藤彩乃, 鈴木智恵, 城田郁子, 榎本由美, 川見美和, 里村藍子, 池田美樹, 原純也, 廣實伸紀, 山崎隆志 (2014). 非国際医療救援拠点病院における語学研修の取り組み. 日赤医学, 66(1), 185.

渡邊智恵 (2014). 国際救援・開発協力コースの学生が認識している困難とその支援. 第15回日本赤十字看護学会学術集会講演集, 248-249.

# International Disaster Relief Nursing Preparatory Course Graduates' Attitudes towards becoming International Disaster Relief Nurses

～ on the actual conditions survey ～

Tomomi FUJII\*, Tomoe WATANABE\*, Yuka MURATA\*

## Abstract:

**Objective:** The objective of this study was to examine the actual conditions of graduates who had completed a preparatory course for International Disaster Relief Nursing towards becoming International Disaster Relief Nurses (hereinafter referred to as IDRN).

**Methods:** The subjects were 45 graduates who had completed the Preparatory Course for International Disaster Relief Nursing. The main item on the questionnaire sought to establish the actual conditions of the aspirant IDRN in their assigned wards. A mail-in self-check questionnaire survey was conducted from December 2014 to January 2015.

**Results:** 13 responded with a valid response rate of 30.2%. The results indicated that the percentage of graduates who aspired to become IDRN had decreased from about 70% to 20%. The reason why many students didn't aspire to become IDRN was that they had to spend their time studying nursing. At the time of the study, no graduates thought that they had reached an appropriate level of nursing competence. Subjects cited inexperience and a desire to prioritize the development of nursing expertise before focusing on becoming IDRN. It became clear that these nurses also need further opportunities to improve their English and a peer support group for aspirant IDRN.

**Conclusion:** The study identified three areas in which further attention is recommended; 1) the need to raise awareness of the realities of nursing society through basic nursing education, 2) the need for self-directed learning for the improvement of English skills, 3) the need for support to maintain motivation to become an IDRN.

## Keywords:

Preparatory Course for International Disaster Relief Nursing, International Disaster Relief Nurse

---

\* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing